平城京左京六条三坊十二坪・東堀河（ひがしほりかわ）の調査

東堀河の発掘調査　調査地は、平城京の条坊復原では左京六条三坊十二坪の東半部中央付近にあたります。十二坪の中央には、東堀河が南北に貫流し、調査地は東堀河の東側に隣接しています。

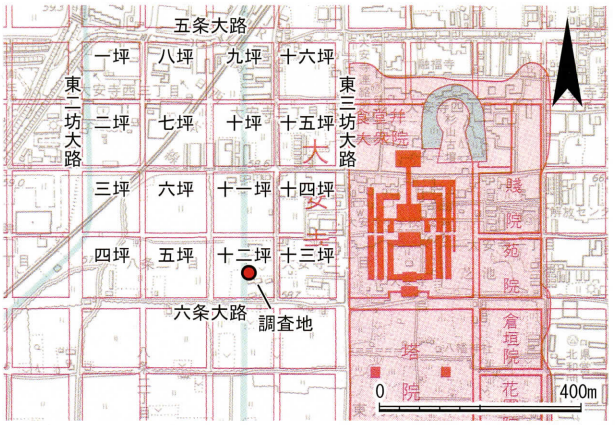
東堀河は、平城京内の左京三坊内を南北に貫く人工の河川で、京内の物資の運搬に利用していたと考えられます。現在も細長い地割として残り、発掘調査では二条条間路から九条大路間の数ヶ所で確認しています。調査では東堀河の両岸には、幅２～６ｍの空閑地があり、その外側に掘立柱建物などの遺構が分布することから、東堀河の両岸に沿って宅地と堀河の間に通路があったものと思われます。今回の発掘調査では、これまでの調査とやや趣の異なった遺構が見つかりましたので、それを紹介します。

調査成果　発掘区は東堀河の地割を含みその東側に細長く設定しました。調査の結果、東堀河とその東側に接続する性格不明の遺構、掘立柱列、井戸、土坑、素掘溝を確認しました。

東堀河は、東岸から4.3ｍ分を確認し、西岸は発掘区外にあります。断面形は２段の逆台形で、河底はほぼ平坦で深さは約1.1ｍあります。砂・砂礫・粘土で埋まり、８世紀後半から９世紀前半の遺物が多数出土しました。出土遺物からは、平安時代の10世紀頃には、東堀河が完全に埋没したことがわかります。

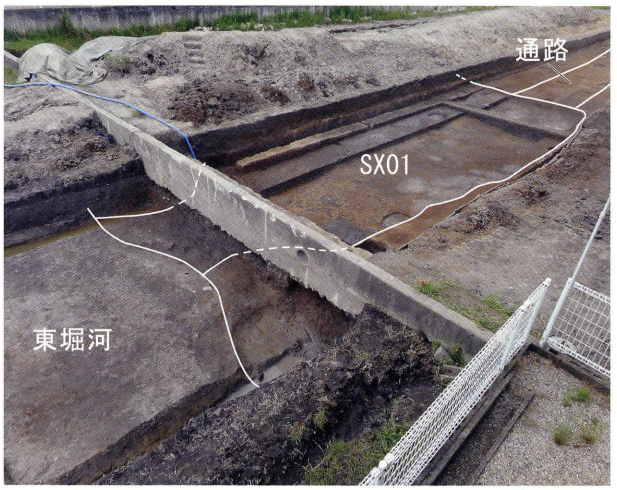
謎の遺構・舟入（ふないり）か？　東堀河の東側では、東西16ｍ、南北6.0ｍ以上の平面不整長方形の性格不明の遺構（ＳＸ01）が見つかりました。ＳＸ01は、幅約2.0ｍ、長さ約1.0ｍの溝を介して東堀河と接続します。ＳＸ01は深さが0.8ｍ、接続部分の溝の深さは約0.6ｍあります。東堀河の深さが約1.1ｍなので、東堀河の水位が川底から0.5ｍを上回ると遺構内に水が流れ込みます。物資を運ぶ舟が行き交う東堀河にはある程度の水量があったと考えると、ＳＸ01は常時水を湛えていたことになります。堀河に接続して物資を荷揚げする舟入の遺構とも考えられますが、前例がなく今後の検討を待ちたいと思います。

平城京跡（左京六条三坊十二坪）　大安寺二丁目



調査地位置図（1/15,000）

発掘区全景（西から）



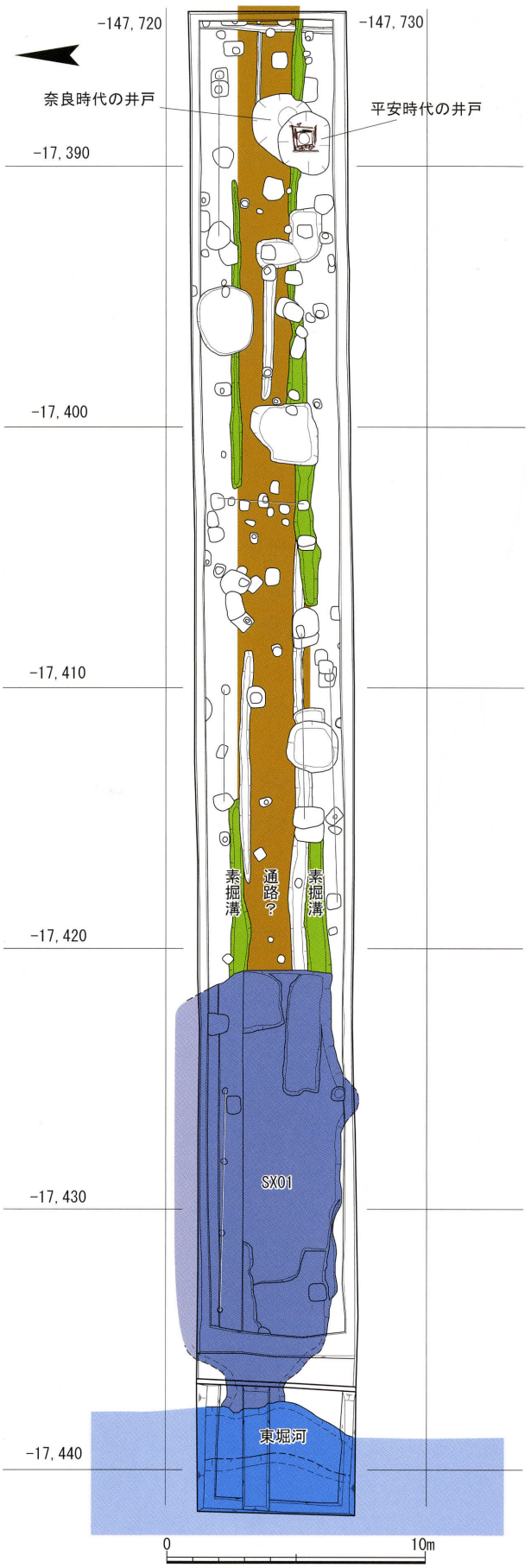
東堀河とSX01（南西から）

井戸とその他の遺構　井戸は重複して２基検出しました。奈良時代の８世紀後半と、平安時代中頃の 10 世紀末～ 11 世紀初頭のもので、後者は板で組んだ井戸枠が残存しています。奈良時代の井戸からは、奈良三彩小壺がほぼ完全な形で出土しました。東堀河が埋没する 10 世紀以後も、周辺には人々が住み続けていたことがわかります。

発掘区中央には、奈良時代の並行する素掘溝が２条あります。溝で挟まれた幅約 3.0 ｍの部分を通路と考えると、通路西側の先には堀河に接続する舟入と考えた遺構ＳＸ 01 があります。東堀河を含めこれらを同時期の遺構と考えると、調査地は水運と陸運の結節点とも言え、東堀河を遡上した物資を荷揚げする人々が行き交う足音も聞こえてきそうです。

奈良時代の井戸（左）と平安時代の井戸（右）（西から）

上　東堀河・SX01 出土遺物
左　奈良時代の井戸出土
　　奈良三彩小壺



発掘区平面図（1/250）